

今物語

大納言なりける人内へまゐりて、女房あまたものがたりしける所にやすらひければ、この人の扇を手毎に取りて見けるに、辨の姿したりける人をかきけるを見て、この女房ども、「泣く音なそへて野べの松虫」と口々にひとりごちあへるを、この人聞きてをかしとおもひたるに、奥の方より唯今人の來たるなめりとおぼゆるに、「こはいかになくねなそへそとおぼゆるは」とあたり顔にいふおとのするを、この今きたる人暫えためらひて、いと人にく、いなるけしきにて、「源氏のまたがさねのまりは短かゝるべきかは」とばかり忍びやかに答ふるを、この男あはれに心にく、おぼえて、ぬしゆかしきものかな、誰ならむと、うちつけにうきたちけり。とふべくもおぼえざりければ、後にえさらぬ人に尋ねければ、「近衛院の御母、ひがごと、かうのと、御局」とさゝやきければ、いでやことわりなるべし。その後は類ひなきもの思ひになりにけり。

大方の秋の別れもかなしきに鳴く音なそへそ野べの松虫。

薩摩守忠度といふ人ありき。ある宮ばらの女房に物申さむとて、局のうへさまにてためらひけるが、殊の外に夜ふけにければ、扇をはらはらとつかひならして聞きまらせければ、この局の心まりの女房、「野もせにすだく虫のねや」とながめけるを聞きて、扇をつかひやみにけ

り。この女房、「扇をばなどやあつかひ給はざりつるぞ」といひければ、「さきかしがましとかやきこえつれば」といひたりける。やさしかりけり。

かしがまし野もせにすだく虫の音よわれだに物はいはでこそ思へ。

ある殿上人、さるべき所へ参りたりけるに、折しも雪降りて月朧なりけるに、中門のいたに侍らひて、寢殿なる女房にわひえらひけるが、「この朧月はいかゞ候ふべき」といひたりければ、女房、返事はなくて、とりあへず、内より疊をおし出したりける心ばやさ、いみじかりけり。

照りもせず曇もはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき。

ある殿上人、古き宮ばらへ夜ふくるほどに参りて北の對のめんだうにたゝすみけるに、局におるゝ人の氣色あまたしければ、ひき隠れてのぞきけるに、御局のやり水に螢のおほくすだきけるを見て、先に立ちたる女房の「螢火亂れ飛んで」とうちながめたるに、次なる人、「夕殿に螢とんで」と口ずさむ。まりに立ちたる人、「かくれぬものは夏虫の」とはなやかにひとりごちたり。とりどりにやさしくもおもしろくて、この男何となくふしなからむもはい無くてねすなきをしいでたりける。さきなる女房、「ものおそろしや。螢にも聲のありけるよ」とて、つやつやさわぎたるけしきなくうち静まりたりける。あまりに色深く悲しくおぼえけるに、今ひとり、「なく虫よりもとこそ」ととりなしたりけり。これも思ひ入りたるほど、おくゆかしくて、すべてとりどりにやさしかりける。

音もせでみさをもゆる螢こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ。

螢火亂飛秋已近、

辰星早沒夜初長。

夕殿螢飛思悄然。

つゝめども隠れぬものは夏虫の身より餘れる思なりけり。

近き御代に、五節のころ、ゆかりにふれてたれとかやの御局へ、ある女のやんごとなき、忍びて参りたりける事ありけるを、ちときこしめして、いかで御らんせむと思しけるまゝに、俄におしいらせ給ひけり。とりあへずともし火を人のけちたりければ、御ふところよりくしをいくらも取りいで、火びつの火にうちいれ給ひたりければ、奥まで見えてよくよく御らんじけり。御心のふせい奥ありていとやさしかりけり。

この頃のこととかや。ある田舎人、いうなる女を語らひて都に住みわたりけるが、とみの事ありて田舎へくだりなむとしけるその夜となりて、この女れいならすうちまめりて、うしろむきてねたりけるを、男いたう恨みてけり。「いつまでか、かくもいとはれまわらせむ。唯今ばかりむき給ひてあれかし」といひけるに、この女、

「今さらにはそむくにはあらず君なくてありぬべきかとならふばかりぞ」

といひたりければ、男めでまどひて、田舎くだりとまりにけるとかや。いとやさしくこそ。

大納言なりける人、日頃心をつくされける女房の許におはして、物語などせられけるが、世に思ふやうならで明けゆく空もなほ心もとなかりければ、あからさまのやうにて立ち出で

「隨身に心をわはせて」「いままばしありて、まことや今宵は内裏の番にてさふらふものを、もしおぼしめし忘れてやとおとなへ」と教へてうちへ入りぬ。そのまゝにまばしありて、こちなげに隨身いさめ申しければ「さることあり。今夜はげに心おくれまにけり」とて、とりあへずいそぎ出でむとせられけるけしきを見て、この女房心得て、やがていとうらめしげなるに、をりふし雨のはらはらとふりたりければ、

「ふれや雨雲の通ひぢみえぬまで必空なる人やとまると」。

いうなるけしきにてわざとならずうちいでたりけるに、この大納言なにかのことはなくて、その夜とまりにけり。後までも絶えずおとづれられけるは、いとやさしくこそ。かく申すは、後徳大寺左大臣と聞えし人のこと、かや。

栗田口の別當入道といひける人、若くて人を思ひけるに、やうやうかれがれになりて後に思ひ出で、糸のありけるをやりたりければ、糸をは返して、歌をなむよみたりける。

「忘れられて思ふばかりのあらばこそかけてもえらぬ夏ひきの糸」。

ある藏人の五位の、月くまなかりける夜、草堂へ参りけるに、いとうつくしげなる女房のひとり参りたりける。見捨てがたくおぼえけるまゝに、いひよりてかたらひければ、「大方さやうの道にはかなひがたき身にてなむ」とやうやうにいひえろひけるを、なほ堪へ難くおぼえて歸りけるに、つきて行きければ一條河原になりにけり。女房見返りて、

「玉みくりうさにしもなど根をとめてひきわけ所なき身なるらむ」

とひとりぢちて、きよめが家のありけるに入りけり。男うれしくもいとあはれにふしぎとおぼえけり。

大納言なりける人、小侍従と聞えし歌よみに通はれけり。ある夜ものいひて曉かへられけるに、女の家をやりいだされけるが、さと見返りたりければ、この女、名残を思ふかとおぼしくて、車よせのすだれにすきて、ひとり残りたりけるが、心にかゝりおぼえてければ、供なりける藏人に、「いまだ入りやらば見送りたるが、ふり捨てがたきに、なにとまれいひて」とのたまひければ、ゆゑしき大事かなと思へども、程ふべきことならねば、やがて走り入りぬ。車寄せのえんのきはにかしこまりて申せと候ふとはさうなくいひ出でたれど何といふべきことの葉もおぼえぬに、折しも夕つけ鳥聲々に鳴き出でたりけるに、あかぬわかれのといひけることの、さと思ひ出でられければ、

「物かはと君がいひけむとりの音のけさしもなどか悲しかるらむ」

とばかりいひかけて、やがて走りつきて車のえりにのりぬ。家に歸りて中門におりて後、「さても何とかいひたりつる」と問ひ給ひければ、「かくこそ」と申しければ、いみじくめでたがられけり。「さればこそ使にははからひつれ」とて感のあまりに、ゑる所などたびたりけるとなむ。この藏人は内裏の六位などへて、やさし藏人といはれけるものなりけり。この大納言も後徳大寺左大臣の御事なり。

能登前司橘長政といひしは、今は世を背きて、法名寂縁とかや申すなんめり。和歌の道を嗜

みて、その名聞ゆる人なり。新勅撰えらばれし時、三首とかや入りたりけるを、すくなしとてきりて出でたりける。すこしはげしきには似たれども、道を立てたるほどはいとやさしくこそ。その人この頃、あるやんごとなき大臣の家に、和歌の會せられけるに、述懐の歌をよみたりける、

「仰げども我が身助くる神無月さてやはつかの空を詠めむ」

とよみたりければ、満座感歎して、この歌よみためて、主も稱美の餘りに、國の所ひとつやがてたまはせたりけり。道の面目、世の繁昌ふしぎのことなり。末代にもさすがかゝるやさしきことの残りたるにこそ。このことを聞きて、隆祐侍従いひやりける歌、

「磨さける君に逢ひてぞ和歌の浦の玉も光をいとほそふらむ」。

吉永前大僧正ときこえしは、今は慈鎮和尚と申すにや。天王寺の別當になりて拜堂有りけるに、上童多く具せられたりける中に、たれがしとかやいひけるちこそ、天王寺に有りける女、堪へがたう思ひかけて、紅梅の檀紙に、心もおよばずあしでをかきて、このちどの許へおこせたりける。ぬしもよそながら、つやつや見玄りたる人もなくて、ひげに耻ぢがましくありぬべかりけるに、このちむうち案ずるけしきなりければ、何とすべさかと人々まばゆく思ひたりけるに、やがてそのあしでのうへに、

「覺束ななにはにかけける言の葉ぞ都に住めばまらぬあしでを」
とかきてやりたりける。とりあへずいとあしからずや。

宇治の左のおとこの御前に、銀をきり火桶につませられて、頼政卿のいまだ若かりける時、召しありて「きり火をけと我が名をかくし題にて、歌つかうまつりて、これを賜はれ」と仰せごとありければ、とりあへず、

「宇治川の瀬々の白浪落ちたざりひをけさいかによりまさるらむ」とよみたりけり。めでさせ給ひけるとなむ。

秦公春といひける隨身、宇治の左大臣殿につかうまつりけるが御香をまゐらせけるが、御香のまきに千鳥をかゝれたりけるを見て、

「香のうちにも飛ぶちどりかな」

といひでたりけるを、とりつぐ殿上人も、ものもいはざりけるに、おほい殿、まばし御香をはき給はで、

「難波なるあしの入江を思ひ出で、」

と仰せられける。いとやあしかりけり。

待賢門院の堀川、上西門院の兵衛、おと、ひなりけり。夜深くなるまで、さうしをみけるに、ともし火のつきたりけるに、あぶらわたをさしたりければ、よにかうばしく匂ひけるを、堀川、

「燈火はたきものにこそ似たりけれ」

といひたりければ、兵衛とりもあへず、

「ちやうじかしらの香やははふらむ」とつれたりける。いとおもしろかりけり。

あるもの所の前を、春の頃、修行者のふしぎなるが通りけるが、ひがさに梅の花を一枝さしたりけるを、ちこども法師など、あまたありけるが、世にをかしげに思ひて、あるちこの、「梅の花笠きたる御房よ」と云ひて、笑ひたりければ、この修行者立ちかへりて、袖かき合せて、るみえみと笑ひて、

「身のうさの隠れざりけるものゆゑに梅の花笠きたる御房よ

と仰せられさふらふやらむ」といひたりければ、このものども、こはいかにと、思はずにおもひて、いひやりたるかたもなくぞありける。さうなく人を笑ふことあるべくもなきことにはや。

ある所にて、この世の連歌の上手と聞ゆる人々、寄り合ひて連歌しけるに、その門のまたに、法師の誠に怪しげなるが、かしらは、をつかみにおひて、かみぎぬのはるほるとあるうちきたるが、つくづくとこの連歌を聞きてありければ、何程のことを聞くらむとをかしと思ひて侍るに、この法師や、久しくありて、うちへ入りて椽のきはにぬたり。人々をかしと思ひてあるに、遙にありて、「ふし物は何にてやらむ」と聞ひければ、その中に、ちとくわうりやうなるものにてありけるやらむ、あまりにをかしくわなづらはしきまゝに、何となく、

「くゝりもとかす足もぬらなす」

といふぞ」といひたりければ、この法師うち聞きて、「二三返ばかり詠じて、「面白く候ふものかな」といひければ、いとをかしと思ふに、「さらば恐れながらつけ候はむ」とて、

「名にしおふ花の白波わたるには」

といひたりければ、いひ出したりける人をはじめて、手を打ちてあざみけり。さてこの僧はいとま申してとてぞ走り出でける。後にこのこと京極中納言聞き給ひて、「いかなるものにかと返す返すゆかしくこそ。いかさまにても唯者にてはよもあらじ。當世はこれ程の句などつくる人は有りがたし。あはれ、歌よみの名人はたゞ傳かうかきたりけるものかな。世の中のやうに恐ろしきものあらじ。よきもあしきも人をあなどることあるまじきこと」とぞいはれる。

伏見中納言といひける人のもとへ、西行法師行きてたづねけるに、あるじはありきたがひたる程に、「さぶらひの出で、「なにごとといふ法師ぞ」といふに、えんに尻かけて居たるを、けしかる法師のかくしれがましきぞなと思ひたるけしきにて、侍どもにらみおこせたるに、みすの内に箏の琴にて、秋風樂をひきすましたるを聞きて、西行この侍に「もの申さむ」といひければ、にくしと思ひながらたち寄りて、「何事ぞ」といふに「みすの内へ申させ給へ」とて、

「ことに身にまむ秋の風かな」

といひでたりければ、「にくきはうしのいひごとかな」とてかまちははりてけり。西行はふはふ歸りてけり。後に中納言の歸りたるに、「かゝるまれものこそ候ひつれ。はよりふせ候ひぬ」

とかしこがほに語りければ、「西行にこそありつらめ。ふしぎのことなり」とて心うがられけり。この侍をばやがて追ひ出してけり。

後白川院の御時、日吉の社に御幸ありて、一夜御とまりありて次の日御下向ありけるに、雨の降りければ、御車近う仕うまつりける上達部の中に、

「きのふ日吉と思ひしものを」

といふ連歌の出で來たりけるを、大方つくる人なくて程へければ、左馬權頭なりける人の、遙にさきなりけるを召しかへして「これつけよ」と仰せごとありければ、ほどなく、

「今日は皆雨ふる里へ歸るかな」

と付けたりければ、「安かりけることを口をしくも思ひよらざりける」と人々いひあへりけり。この左馬權頭、賀茂の臨時祭の舞人なりけるに曉つかひなりける人をうちぐして歸り、たちに参加りけるが、雪いたくふりて袖にたまりたりけるをみて、

「あをすりの竹にも雪はつもりけり」

といひたりけるに、使なりける人はつけざりければ、秦兼任、人長にてうちぐしてけるが、馬をうちよせうちよせけしきはみければ、「兼任がつけたるとおぼゆるぞ」といはれて「下臈はいかでか」とは、しくいひけるを、猶せめとはれて、

「色はかざしの花にまがひて」

と付けたりける。誠に兼久、兼方などが子孫とおぼえていとやさしかりけり。

やんごとなき人のもとに、今参りの侍出で來にけり。やき繪をめでたくするよし、聞えければ、前によびて、檀紙にやき糸をせさせけるに、「何をかやき侍るべき」といひければ、「水に鴛をやけ」といはれてけるに、うちうなづきて、

「水にはをしをいかやくべき」

と口ずさみけるを、あるじ聞きとがめて、「おなじくは一首になせ」といはれければ、かいかしこまりて、

「波のうつ岩より火をば出すとも」

といへりければ、人々皆ほめにけり。

京極太政大臣と聞えける人、いまだ位浅かりけるほどに、雲居寺の程を通られけるに、瞻西上人の家をふきけるを見て、雑色を使にて、

「ひじりのやをばめかくしにふけ」

といはせて、車を早くやらせけるに、雑色の走りかへるうしろに、小法師を走らせて、

「あめの下にもりて聞ゆることもあり」

といはせたりける。そのほどの早さ、けしからざりけり。

待賢門院の女房加賀といふ歌よみあり。

「兼ねてより思ひしことぞふし柴のこるばかりなる歎せむとは」

といふ歌を、年ごろよみて持たりけるを、同じくはさりぬべき人に言ひつびて忘られたり

ひによみたらば集などに入りたらむもいうなるべしと思ひて、いかゞありけむ、花園の左のおとゞに申しそめてけり。その後思ひの如くやありけむ、この歌をまゐらせたりければ、大臣殿もいみじくおはれにおぼしけり。かひがひしく千載集に入りけり。世の人、「ふし柴の加賀」とぞいひける。

松殿の思はせ給ひける女房、かれがれになり給ひて後、はかなき御情だにも稀なりければ、我ながらあらぬかとのみたどりわび、人の心の花にまかせて月日を空しくうつりゆくに、宮の鶯も、さへづりすれども、思わればさくことをやめつ。うつばりのつばくらめならび住めども、身老ゆればねたます。ちゝたる春の日も、獨すめばいとゞくれやらす。せうせうたる秋の夜は空しき床にあかしがたくて過ぐしけるに、事のよすがやありけむ、むかへに御車を遣されたりける。夢うつゝともわきかねつらむ、嬉しとも思ひさだめず。さればとて今更待ちよろこび顔ならむもいたうつれなく、身ながらもなかなかうとましかりぬべければ、これにこそ日頃のつきせぬ歎もあらはさめと思ひつ。よりてたけにあまうたる髪をおしきりて、白き薄葉に包みて、

「今更にふたゝび物を思へとやいつもかはらぬおなじうき身に」

と書きつけて御車にいれて参らせたりける。この人は後にはみそのゝ尾とて近くまでも聞えしとかや。

東山のかたすみ、おはれに仁人も影みぬあばらやに、いとやさしく、いまだ人なれぬ女あり

けり。庭の萩原まねけども風より外はとふ人もなく、軒ばの蓬繁れども、杉村ならねばかひなくて、月にながめ嵐にかこちても、心をいたましむるたよりはおほく、花を見、郭公を聞きてもなぐさむべきかたはまれなるとにて明し暮すに、清水詣のついでに思はぬ外のさかしら出で来て、いたらぬくまなかりし御心にたゞ一夜の夢の契を結びまゐらせてける。これも前世を思へばかたじけなかりけれども、さしあたりてなげきに恨をそへて心のうちはるゝまもなし。かひなくありふれど、今一度のことはばかりの御情だに待ちかねて、よしこれゆゑそむくべきうき世なりけりと思ひ立ちて、ありし御心まりの許へつかはしける、

「なかなかにとはぬも人の嬉しきはうき世をいとふたよりなりけり」

とばかり、心にくゝをさなびれたる手にてはなだの薄葉に書きたるを、折を窺ひて奏しければ、「誠にさるとあり。尋ねざりける心おくれこそ」と御氣色ありければ、やがて走り向ひて尋ぬるに、さらぬだに荒れたる宿の人住むけしきもなさを、やゝ久しくやすらひて、老いたる女一人尋ねえて、ことのやうをくはしく問ひければ、「何といふことはまり侍らす。あるじは天王寺へ参り給ひぬ」といへば、やがてそれより天王寺へまゐり寺々を尋ぬるに、龜井のあたりにおとなしき尼ひとり女房二三人ある中に、いと若き尼のことにたどたどしげなるあり。この心まりを見つけて、あさましと思ひげにて唯やがてうつふして薄くより外のことなし。かたへのもども聲をたてぬばかりにて、おとる袖なくまぼりければ、御使も見捨て、歸るべき心ちもせず。おとなしき尼はこの人の母なりければ、事のやうこまかに尋ねけれ

ども、「もとよりこれは思ひつることなり。何しにかは君の御故にて候ふべき。かしてく」といひもあへず泣きてその後は答へざりければ、よしなき御使をしてかはゆきことを見つるよと悲しくて、さりとてもこゝにて世をつくすべきならねば立ち歸りぬ。このよしを奏するに、「はしたなの心のたてざまや。心おくれがとがになりつるよ」とてかひなかりけり。あはれにもやさしくも長き世の物語にぞなりぬる。みそ野の尾の心とはいづれか深からむ。

ある人、事ありて遠き國へ流されけるに、年頃心ざし深かりける女のはらみたるを見捨て、行きければ、いかばかりの別れにかありけむ。その後この女尋ね行かむとまげれども、父母有りける故にてゆるさざりければ、唯一人出で、行きけるに、漸その國までかゝりつきにけり。腹なる子の生れむとまげれば、かた山にて産みおとして、きたりける物にひきつゝ、みて捨て置きて、血つきたる物おとあらはむとて、人の家のありけるかたへ、漸よろほひ行きけるに、この家にはしをあつむるおとして、「流され人の死にたるを葬らむする」といふ。殊にあやしく胸つぶれてくはしくたづねければ、「京なる人を戀ひ悲しみて今朝うせたまひたる」といふに、唯この人なりけり、言葉もたゝすわなゝかれけれど、からくしてこの死人のもとに行きて見れば、我が男なりけり。悲しきこと限りなくて、枕がみにゐて、「かく参りたるなり。今一度めみ合せ給へ」と泣きもまれて、この男いき出で、目を見合せて、「この世にてはいまはいかにもかなふまじきぞ」とばかりいひて、やがてまた死にけり。さてのみあるべきならねば、はふりけるに、その火にこの女飛び入りてやけ死に、けり。「腹の中の子を

うみおとしけるは罪の淺かりけるにや」といひあへりける。一人具したりけるめのわらはもとも火に入らむとまけれど、取りとめてこの人の有様をくはしく尋ね、うみおとしつる子などをもちりて、村のものゝ養ひけるとぞ。このことは近きほどのことなり。

小式部内侍、大二條殿に思しめされける頃、久しく仰せことなかりける夕暮に、あながちに戀ひ奉りて、はし近くながめ居たるに、御車の音などもなくて、ふと入らせ給ひたりければ、待ちえて夜もすがら語らひ申しける。曉方にいさゝかまどろみたる夢に、糸の付きたる針を御直衣の袖にさすと見て夢さめぬ。さて歸らせ給ひにけるあしたに、御名残を思ひ出で、例のはし近くながめ居たるに、前なる櫻の木に、糸のさがりたるを、あやしと思ひて見ければ、夢に御直衣の袖にさしつる針なりけり。いとふしきなり。あながちに物を思ふ折には、木草なれども、かやうなる事の侍るにや。その夜御渡あること、まことにはなかりけり。

小大進と聞えし歌よみ、いとまづしくて、うづまさへ参りて御前の柱に書きつけゝる歌、
「なもやくし憐み給へ世の中にありわづらふもおなじ病を」

とよみたりければ、程なく八幡の別當光清に相ぐして楽しくなりけり。子など出でて、後もるともに居たりける所、近きところに芋のつるのはひかゝりて、ぬかごなどのなりたりけるを見て、光清、

「はふ程にいもがぬかごはなりにけり」といひたりければ、程なく小大進、

「今はもりもやとるべかるらむ」
とつけたりける。面白かりけり。

ある女房の、賀茂のたゞすに七日籠りてまかりいづるとて物にかきつけ、

「鳥のこのたゞすのなかに籠りてかへらむ時はとはざらめやは」

とよめりければ、わはれとやおほしめしけむ、やがてめでたき人に思はれて、さいはひ人といはれけり。

賀茂に、常につかうまつりける女房の、久しくまゐらざりける、夢にゆふまでのされに書きたりけるものを、直衣きたりける人の賜はせけるを見れば、

「思ひ出づや思ひぞいづる春雨に涙とりそへぬれしすがたを」

とありけるを見て夢さめにけり。わはれと思ふほどに、手に物のにぎられたりけるを見ければ、ゆふまでのされに、墨三十一付きたるにあり。殊にわはれにめでたく、涙もとゞまらずぞありける。

嘉祥寺僧都海惠といひける人の、いまだ若くて病大事にてかぎりになりけるころ、ねいりたる人俄におきて「そこなるふみ、など取り入れぬぞ」ときびしくいはれけれども、さる文なかりければうつゝならずおぼえて、前なるものどもあきれあやしみけるに、みづから立ち走りてあかり障子をわけてたてぶみをとりに見ければ、ものども誠にふしぎにおぼえて見る程に、これをひろげて見て、まばしうち案じて、返事書きてさし置きて、又やがてねいりけ

り。起きふしもたやすからずなりたる人の、いかなりけることにかとあやしみけるほどに、暫しねいりて汗おびたしく流れて起きあがりて「ふしぎの夢を見たりつる」とて語られける。「大きな猿のあむすりの水干きたるが、たてぶみたる文をもて來つるを、人の遅く取り入れつるに、みづからこれを取りて見つれば歌一首あり。

頼めつゝ、こぬ年月を重ねればくちせぬ契いかゝ結ばむ。

とありつれば、御返事には、

心をばかけてぞ頼むゆふだすき七の社の玉のいがきに。

とかきて參らせつるなり。これは山王よりの御歌を賜はりて侍るなり」と語られければ、前なる人あさましくふしぎに覺えて、「これは唯今うつゝに侍るとなり。これこそ御ふみよ。又かゝせ給へる御返事よ」といひければ、正念に住して前なる文どもをひろげて見けるに露たがふことなし。その後病をこたりにけり。いとふしぎなり。

延應元年正月十九日の曉、ある人の夢に、清水の地主よりとて御文ありけるを見ければ、

「月日のみ杉の板戸のわけくれてすぎにし方は夢かうつゝか」

と有りけり。いとあはれにめでたかりけり。

八幡の袈裟御子が、さいはひの後うちつゞき人に思はれて、大菩薩の御事をまゐらせざりければ、若宮の御たゝりにて、ひとりもたりけるむすめ、大事にやみて目のつぶれたりけるを、と祈りをせず、むすめを若宮の御前にぐして參りて膝の上に横ざまにかきふせて、

「奥山にまをるまをりはたれがため身をかきわけてうめる子のため」といふ歌を神歌に泣く泣くあまたいび歌ひたりければ、やがて御前にてやまひやみ目もさわさわとあきにけり。

讃岐三位俊盛と聞えし人、春日の月詣でをまけるに、定まりたるにて夜とまりにまゐりて曉下向しけるに、夜深かりけるたび、雨降りていと所せかりけるに、後生の事をかく程に信を致して佛にも仕うまつらばいかばかりめでたかりなむ、現世の事のみ思ひてこの宮にのみ仕うまつると思ひて、春日山を通りけるに、高き梢より「菩提の道も我が山の道」といふ御聲の聞えけるに、限りなく信おこりてたふとおほえける。

比叡の山横川に住みける僧の許に小法師のありけるが、坊の前に柿の木のありけるを、切りてたかむとて、いちのされをわりたりける中に黒みのありけるが、文字に似たりけるを怪しと思ひて坊主に見せたりければ、南無阿彌陀佛といふ文字にてありける。ふしぎなどいふばかりなくて、横川の長吏に法印といひける人に見せたりければ、上西門院折ふし御社に御籠り有りけるに、もて参りて御覽せさせければ、とらせ給ひて後白川院に参らせ給ひてけり。蓮花王院（お）の寶藏に納まりけるを「我が所にこそおくべけれ」とて憤り申しけるとなむ。

安貞の頃、河内の國に百姓ありけるが子に蓮花王といひけるわらはありけり。七つなりける年死にけるが、念佛申して西に向ひて傍なる人に、「われ死にたらば七月（お）といはむにあげて見よ」といひて死にけり。その後人の夢に「必ずあけよ」といふと見て、あけてければ、舍利に

なりけり。これを取りて人に拜ませむとて、かりそめにちやうをして入れたりけるに、この帳をほとんどなく虫の食ひたりけるを見ければ、

「歸命蓮花王、

大聖觀自在、

廣度衆生界、

父母善知識」

多

とくひて、はての文字の所に、虫の死にてありける。いとふしぎにめでたき事あり。

鎌倉武士、入道して高野山の蓮花谷におこなふありけり。このものがぬる所にて、夜な夜な女と物語をしける音のまければ、具したりける弟子ども大方心得がたくて、びんぎのありけるに、ある弟子この入道に尋ねたりければ、「さることあり。我が女の鎌倉に有りしが、夜な夜なこゝへ来るなり。それに何事もいひあはせ、又古里の事の覺束なさも語り、世間の事もはからひなどしてあるなり」といひければ、弟子いふばかりなくふしぎに覺えて、ふしぎのあまりに、空阿彌陀佛に有りのまゝに申しければ、空阿彌陀佛うち案じて、「さること多くあり。この女のいたく戀しく思ふによりてたましひなどの通ふにこそ。この定ならば臨終の妨げにもなりなむ。急ぎ祈るべきぞ」とて祈られけり。ある時に、「念佛にて祈りて見む」とて、蓮花谷のひじり三四十人ばかりめぐりゐて、この入道の中にするて念佛を責めふせて申したるに、入道同じく申しけるが、空阿彌陀佛の秘藏の本尊の、帳に入りたるがおはしましける、そのかたをつくづくと守りて、恐ろしげに思ひて、わなわなと慄ひければ、空阿彌陀佛より、「など恐ろしげには思ひたるぞ」と問へば、「その御本尊の御前にかの女房まうでさ

て我を世に恨めしげに見て候ふが、などやらひ餘りに恐ろしく」と申しければ、その時、空阿彌陀佛、「門々不同、八方四爲、滅無明果、業因利劍、即是彌陀、號一聲稱、念罪皆除」とたかく誦せられたりければ、この女の顔の中より二つにわれて、ちるやうに見えてうせにけり。これをば人は見ず、唯入道ばかり見て、いといおそろしくて、つんつんとかみへをどりたるが、その後はもとの心になりておこなひけり。念佛の力のたふときこと、いと人々尊びあひけり。本體の女は、つやつやさることなくともとのやうに鎌倉にありけりとぞ聞えし。天魔のまわざか、又めの戀しと思ひけるが故にか。いとふしぎなり。

少輔入道と聞えし歌よみ、有馬の社にまうで、社の前なるものを見て、

「この山のまゝいかめしく見ゆるかないかなる神の廣前ぞこは」

とよめりける。いと興ありてこそ聞えけれ。びんなささまにてぞ聞ゆる。すべてかやうの歌いみじく詠まれけるとかや。寄鳥述懐の歌に、

「このうちも猶うらやまし山がらの身のはど隠す夕顔の宿」。

風の氣ありて灸治まけるに、人のとぶらひて侍りける返事に、

「年へたる風の通路たづねずば蓬が關をいかするまし」。

この人うせて後、宇治なる僧の夢に、ありしよりことのはかにぼけたるさまにて、

「我が身いかにするがの山のうつゝにも夢にも今は問ふ人のなき」

にあはれに侍りけれ。

ある人の夢に、その正體もなきもの影のやうなるが見えけるを、「あれは何人ぞ」と尋ねければ、「紫式部なり。そらごとをのみ多くまわつめて人の心を感はず故に、地獄におちて苦を受くることいと堪へがたし。源氏の物語の名をぐして、なもあみだ佛といふ歌を卷毎に人々によませて、我がくるしみを訪ひ給へ」といひければ、「いかやうに讀むべきにか」と尋ねけるに、

「桐壺に迷はむ聞もはるばかりなもあみだ佛と常にいはなむ」とぞいひける。

昔の周防内侍が家のあさましながら、建久の比まで冷泉堀川の西と北とのすみには、朽ち残りと有りけるを行きて見ければ、

「我さへ軒の玄のぶ草」

と柱に昔の手にて書き付けたりしがありける、いとあはれなりけり。これを見てある歌よみかきつけゝる、

「これやその昔の跡と思ふにも忍ぶあはれのたえぬ宿かな」

近頃和歌の道、殊にもてなされしかば、内裏、仙洞、攝家、いづれもとりどりにそこをきはめさせ給へり。臣下あまた聞えし中に、民部卿定家、宮内卿家隆とて、家の風絶ゆることなく、その道に名を得たりし人々なりしかば、この二人には、いづれも及ばざりけるに、或る時、攝

政殿宮内卿をゆして「當時たゞしき歌よみ多く聞ゆる中に、いづれかすやれ侍る。心に思はひやう、ありのまゝに」と御尋ねありければ「いづれともわき難く候ふ」とばかり申して思ふやうありずなるを、「いかにいかに」とおながちに問はせ給ひければ、ふところよりたゞ紙を落してやがて出でにけり。御覽せられければ、

「明けばまた秋の半も過ぎぬべしかたぶく月のをしきのみかは」

と書きたり。この歌は民部卿の歌なり。かゝる御尋ねあるべしとはいかでかまふべき。唯もとより面白くおぼえて書きつけてもたれけるなめり。その後また民部卿を召してささのやうに尋ねらるゝに、これも申しやりたるかたなくて、

「鶴のわたすやいづこ夕霜のくもむに白き峯のかけ橋」

と高やかにながめて出でぬ。これは宮内卿の歌なりけり。まめやかなの上手の心は、さればひとつなりけるにや。

後拾遺を撰ばれける時、秦兼方といひける隨身、

「こぞ見しに色も變らず咲きにけり花こそ物はおもはざりけれ」

といふ歌をよみてえらぶ人の許に行きてこの歌入れひと望みけるに、「花こそといへるがいぬの名に似たる」と難じけるを聞きて、立ちざまに「この殿は勅撰などうけたまはるべき人にてはおはせざりけるものを、花こそ宿のあるじなりけれといふ歌もあるは」といひかけてける、いとはしたなかりけり。

西行法師が陸奥の方に修行しけるに千載集撰ばると聞きてゆかしさにわざとのぼりけるに、まける人行きあひにけり。この集の事ども尋ね開きて、「我がよみたる

嶋たつ澤の秋の夕暮

といふ歌や入りたる」と尋ねけるに、「さもなし」といひければ、「さてはのぼりて何にかはせむ」とてやがて歸りにけり。

ある人、歌よみ集めて、三位大進と聞えし人の許に行きて見せわはせけるに、「侍るといふことをよみたりけるを歌の言葉にあらず」といひければ、「古き歌にまさしくあり」といひけり。「よもあらじものを」といふに、「いで、ひき出で、見せ奉らむ」とて、古今をひらきて、

「山がつの垣はにはへるわをつらら」

といふ歌を見せける。いとをかしかりけり。

下毛野武正といひける隨身の、關白殿の北のだいのうしろを誠にゆゝしげにてとほりけるに、局のさうじ、「あなゆゝし鳩ふく秋とこそ思ひ參らすれ」といひたりければ、「ついでされ」といひてけり。女心うげにて隠れにけり。隨身所にて秦兼弘といふ隨身にあひて、「北のだいのめのわらはべに散々にのられたりつる」といひければ、「いかやうにのられたるぞ」と問はれて「鳩吹く秋とこそ思へ」といふに、兼弘は兼方が孫にて、兼久が子なりければ、かやうの事心得たる者にて、「口をしきことのためひけるかな。府生殿を思ひかけていひけるにこそ。み山出で、鳩ふく秋の夕暮はまばしと人をいはぬばかりぞ

といふ歌の心なるべし。まばしとまり給へといひけるにこそ。むげに色なくいかにのり給ひけるぞ」といひければ、「いでいでさては色直して參らむ」とて、ありつるつばねのまも口に行きて、「もの承らむ。たけまさ、はとふく秋ぞ、ようよう」といひたりける、いとをかしかりけり。

鳥羽院の御時、花の盛に法勝寺へ御幸ならむとまけるに、執行なりける人、見てとて參りけるに庭のうへに、所もなく花散りしきたりけるを「あさましきことなり。唯今御幸のならむするに今まで庭をはかせざりける」とまかり腹立ちて、公文の從儀師をめて、「今までいかにさうぢをばせざりけるぞ。ふしぎなり」といひければ、つひいひまづきて、

「散るもうし散りまゝ庭もはかまうし花に物思ふ春の殿守」

と申して、「こや御房がはき侍らぬに」などいひければ、「は、かつひ」といひておほまかりけり。

承久の頃、住吉へ然るべき人の參らせ給ひけるに、折ふし神主經國京へ出でたりけるが、人をはしらせて「住のえ殿など掃除せさせよ」といひやりたりけるに、餘りのきらめきに年頃然るべき人々の書き置かれたる歌ども柱なげし妻戸にありけるを、皆削り捨てけり。神主くだりてこれを見て、こはいかにせむと足ずりをして悲しめどもかひなかりけり。これを見てふるき尼の書きつけたる、

「世の中の移りにければ住吉の昔の跡もとまらざりけり」。

これは承久の亂の後、世の中あらたまりける時のことなり。

松島の上人といふ人ありけり。修行者のあはむとて行きたりけるに、幽玄なる僧の出であひたりければいと思はずに覺えてかへりいたりける跡に又ありける僧に、「あれは誰にておはしますにか」と尋ねければ、「あれこそひじりの御房よ」といひけるに、「たふとげになむとやおはしますすらむとこそ思ひつれ」といふを、ひじり物ぞしに聞きてよめる歌、

「紫の雲まつ島に住めばこそ空ひじりとも人のいふらめ」

とよめりけり。この聖の許へ、肥後の右衛門入道といひける者行きて、「かくておはします程何事か候ふ」と尋ねければ、「させることも侍らず。法華經など覺え奉りて、ねたるをりをりこの島の松の葉ごとと金色の光の見えるてかやくことなどを侍る」といはれけるいとめでたかりけり。

文學上人、佐渡國に流されたりけるが、召し歸されたりけるに、あるやんどあき哥よみのもとより、

「別れしを悲しと聞きし老の身の今までありし嬉しきはいかに」とありければ、返し、

「嬉しさも都にいでしそはいかに今はかへりてかたるおいせを」。

この上人の歌に、

「世の中に地頭ぬす人なかりせば人のこゝろはのとけからまし」

とよみて「我が身は業平にはまさりたり。春の心はのとけからまじといへる、何條春に心の
あるべきぞ」といひけり。

小侍従が子に法橋實賢といふものありけり。いかなりける事にか、世の人これをひきがへる
といふ名をつけたりける。法眼をのぞみ申して、

「法の橋のまたに年ふるひきがへる今ひとあがりとびあがらばや」

と申したりければ、やがてなされにけり。

弘誓房といふ説經師、人の物をかりて多くなりて後返しやるとて、その文のうちに書きつけ
ゝる、

「夜や寒き衣や薄きかる錢の日頃をへてはあつつかひつゝ」。

然るべき所に佛供養をけるに、堂のかざりより始めて、えもいはぬ聽聞の局の几帳の中にそ
らだきの香みちていみじかりけるに、聽聞の人の多く集まりて耳をすましたるに内よりお
びたいしく大きなるへの音出できにけり。皆人興さめて侍るに、導師とりもあへず、「放逸邪
見の里にはついくわをもをしび。聽聞隨喜の局よりおほへをこそうちいだされたれ」といひ
たりける。あさましくもかしくもありけり。

ある説經師の、請用して殊にめでたく尊く説法せむとしけるに、はこのしたかりければ、こ
といそが難しく成りてよろづいそきて、布施もとらず歸りてものぬぎちらして、いそぎひと
のへ行きたりけるに、へばかりひりて又ものもなかりけり。かゝるべしと知りたらば、高座

の上にもまばしこらへて説經をもすべかりけるものと悔しく思ひてける程に、その次の日、また人に呼ばれて説經しける程に、又はこのまばかりけるをすかしてむと思ひて少し居なほるやうにしければ、まことの物多くいでにけり。この僧すべきかたなくて、「きのふはここにすかされてへを仕る。けふはへにすかされてはこを仕る」といひて走りおりてにげいでにければ、うへの袴よりたりおちて堂の中きたなくなりけり。聴聞の人、鼻をおさへて興さめてけり。いとをかしかりけり。

念佛者の中に、つちゆいふけはつといふ僧ありけり。ある所に、板ぶろといふ物をして人々入りけるに、この僧、目をやむよしひければ、目をひさぎているは苦しかるまじきよしを人々いひければ、さらばとて目をゆひて板ぶろの有様もまらぬものゝ、目は見えざりければ、風呂の前にわき戸のうちありけるに、ふろと心えて、はだかにてかゝへたる所もうちとけてゐにけり。人々女房など見おこせたるに裸なる法師の、隠し所もうちいだして「あなぬるのふろや。たけたけ」といひてゐたりける。いとをかしかりけり。人々笑ひける聲を聞きあやしく思ひて、目をあけて見れば、風呂にてもなき所にゐて、人々笑ひける時にあさましくおぼえて走りにげにけり。人々をかしく思ひあへりけり。

今

物

語

終